

吉永契一郎（大学教育開発研究センター）

『大学教育研究年報』第6号は、特集として、人文学部・工学部における導入教育及び、単位制実質化のためのCAP制を取り上げ、さらに、教育改善を目的とする個別研究成果の発表、大阪女学院短期大学副学長の智原哲郎氏による講演を収録した。それぞれの成果については、各報告を読んでいただくこととして、ここでは、『年報』全体を通して見た今日の大学教育の課題について考えてみたい。

まず、導入教育において強調される、大学において学ぶための「作法」の必要性である。学部で行う導入教育が果たして「教養科目」に相応しいものであるかどうかについては議論もあろう。しかしながら、人文学部及び工学部の報告例から明かなことは、今日の新入生がかなり基本的な所で大学の授業に対して「躓き」を抱えており、支援を必要としているという事実である。導入教育の具体的な事例については、学部ごとの特性もあるであろうが、「躓き」の解消自体は、教養・専門の区別なくその後の大学生活全般によい影響をもたらすものであり、この点が受講学生自身の高い満足度にも現れているのではないだろうか。

さらに、導入教育・CAP制の意義は、学生のみならず教員に対しても意識の変革を迫るところにある。せっかくレポートの書き方や議論の仕方を習得したところで、教員が一方向的に講義を行い、知識の有無のみをテストにおいて確認するのであれば、それらの技法が無駄になることは言うまでもない。また、単位制の実質化においても、最も責任を負うのは教員自身であり、授業外での学習を必要としない講義が多ければ、学生が時間を持て余すのは当然なのである。これらの点において、智原氏が「教育理念の明確化／共有化」さらに、「アウトプット重視」を提唱していることは英語教育に限らない大学教育の課題である。

授業支援の方策として、「AV教材」や「遠隔授業」は今後とも活用されるであろう。現在は、まだ準備段階の粋を出ないが、活用次第では、学生の意欲を引き出す上で大きな可能性を持つと思われる。しかしながら、小さな頃からテレビ・パソコン等のバーチャルな世界に育ってきた今日の大学生にとって、具体的な生活体験・学習経験が持つ意義も見逃すことができない。この点、大橋氏・赤井氏の報告は貴重な示唆に富むものであり、知識を習得する以前の意欲・主体性の涵養に言及するものである。学生の目的意識がはっきりしており、授業がその意欲に答えるようなきちんとした構成を持つとき、いかに成果をあげ得るかは金山・高橋両氏の報告に詳しい。

授業改善・教育改善のための研究を引き受けられ、『年報』のために快く報告をお寄せいただいた各位に感謝する次第である。